学病院で
初の治験へ

本で初めての骨補事承認を目指す。薬品医療機器等法法）が施行されてでは初の治験としても注目を集めている。

炭酸アパタイトの開発を進めてきた九州大学歯学研究院の石川邦夫教授は、「骨の組成は水酸アパタイトではなく炭酸アパタイト。骨補填材としての有用性を徳島大学の宮本教授と調べたところ、水酸アパタイトは骨に置換されないが、炭酸アパタイトは骨と同様にリモデリングして骨に置換した。さらに骨伝導性も高かった」と説明する。

約1年の治験期間を経て、平成29年度の薬事承認を見込んでいる。

が発見

科のエミリオ・グループは、スノロンアセトニ導能を有するのを使った実験で用いて、軟骨細骨修復を確認。薬剤で臨床応用節軟骨再生治療」としている。

にも大きな問題にる。

ループは、ヒト骨葉系幹細胞を高密、軟骨基質合成に響を検討した。その結果、幹細胞を軟骨細胞に分化させる誘導因子として知られているTGF—β3とFAを使って一緒に刺激を与えると、軟骨気質合成を著明に促進するのが分かった。

プロテオグリカンの一種のアグリカンと、軟骨細胞分化マーカーのⅡ型コラーゲンの遺伝子発現量をRT—PCR法で評価すると、両遺伝子の発現レベルが有意に増加していた。

FAとTGF—β3を使って軟骨細胞へ分化誘導した細胞塊を関節軟骨欠損マウスの欠損部に移植する実験では、欠損部にⅡ型コラーゲン陽性の軟骨組織再生を認めた。一方、TGF—β3単独刺激群と、以前から誘導因子として使われているデキサメタゾン（DEX）とTGF—β3刺激群では、軟骨再生はほとんどしなかった。

分子レベルで作用機序を調べると、FAはグルココルチコイド受容体を活性化し、核内移行を促進することで、軟骨細胞分化を正に制御していると判明。DEXにも同様の作用が確認できたが、FAと比べて顕著に低かった。

同研究成果は米国骨代謝学会雑誌「Journal of Bone and Mineral Tesearch」（3月7日）で公開している。

響か

アセトアルデヒド
口中濃度を調査

「3分のルデヒ・0pp・0ppルコールる。タバく、口のルコース報告があん性が指摘されており、世界保健機構は6・1〜36・1ppbの生理的濃度でも、長期間の暴露はがんのリスクと指摘している。

研究グループは、「舌苔とがんとの関連を結びつける可能性が示唆された」としている。

同研究成果は「Journal of Applied Oral Science」電子版（3月6日）で公開している。

デンタル小町が通る

日本大学歯学部歯科補綴学
第Ⅰ講座助教

伊藤智加❶

歯科医師が通る〝道〟

1〜3月にかけての受験シーズンが終わり、4月になると新入生の初々しくてうれしそうな顔を学内で見ることができます。私もウン十年前に同じ道を通って来たかと思うと、感慨深いものです。

幼少期にいわゆる「お受験」のための勉強をし、結果として大学まである一貫教育の学校に入学しました。そのため「受験」とはほぼ無縁の世界でスクスクではなく「ぬくぬく」と育ち、とにかく勉強するのを避け続けた私は、試験前にも特別な勉強はせずに「試験は普段の実力を試すもの！」というある意味、素晴らしく自分に都合のよい「妙なセオリー」を作り上げ、学生時代ずっとそれを貫き通して来ました。失敗も多くしましたが、今思うとわれながら驚きです。

試験というのはいつになっても嫌なもので、私はいまだに試験の夢を見ます。それも「試験が始まるのに何も勉強していない！」という最悪の夢です。夢から覚めた時の安堵感は言葉では言い表せませんが、目覚めの悪さはしばらく残ります。

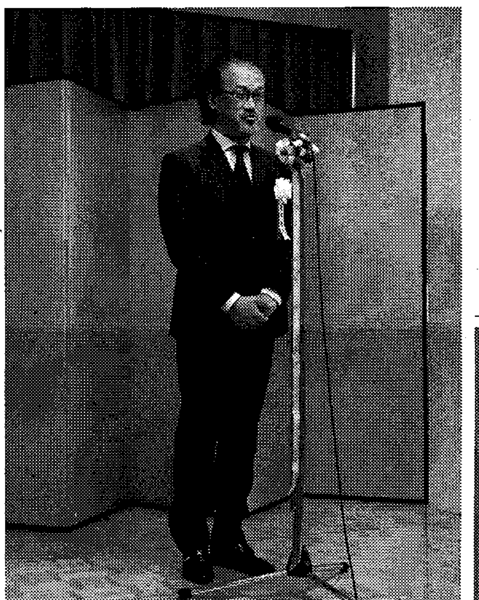
大学生活も終盤を迎えたころ、残念ながら国家試験には「妙なセオリー」が通用しないことに気付きました。まあ、確かに6年間の知識の全てをもって試験に臨むという点では「妙なセオリー」と合致しているのですが、実際には合格するための試験勉強を要領よくこなす必要があるなど、明らかに違うものです。

大学教員の立場から今の学生を見ていると、入試が終わり、晴れて大学に入学した直後から「ホッ」とする間もなく、今度は国家試験という名の亡霊に付きまとわれて6年間を過ごしているように思えます。国家試験のシステム自体がわれわれのころとは違っているので仕方ないのかもしれませんが、それに追われ続ける学生の姿が何とも気の毒に思えてなりません。

歯学部に入ったからには国家試験に合格しなければ話にならないのは承知の上ですが、人生でとても大切なこの時期に、心にもう少し余裕を持たせてあげられたらと思わずにはいられません。

こんなことを言っていては、教員としては失格なのかもしれませんが……。

SNSでも情報発信中！
@shikashinbun
fb.me/dentalnewspress
日本歯科新聞社



岩田氏に「大山激励賞」
カンボジアで口腔がん治療

2001年から10年以上にわたり、カンボジアで口腔腫瘍の除去など1200件を超える手術を無償で行ってきた功績が認められ、大山健康財団（藤森一平理事長）が授与する平成26年度「大山激励賞」をフリーランスの口腔外科医・岩田雅裕氏（元岸和田徳洲会病院顎顔面口腔外科部長・口腔インプラントセンター長）=**写真**=が受賞した。同賞の受賞は歯科医療関係者では初。贈呈式は3月19日に東京・千代田区の霞が関ビルで行われた。

今回の受賞に際し、岩田氏は「ASEAN諸国を中心に長年取り組んできたボランティア活動を評価していただき大変光栄です。極めて質の高い日本の口腔外科医療の技術をASEAN諸国に伝え、少しでも健康に貢献したいとの思いで活動を続けています。この受賞を励みに国境を越えた歯科医療の支援活動を継続していきたいと思っています」と抱負を述べた。

岩田氏が受賞した大山激励賞は、発展途上国で医療協力に尽くし、特に感染症対策に尽力した医療関係者で、今後も発展途上国においてなお一層の活躍が期待される人に贈られるもの。

さらに、北アフリカのスーダンで巡回診療から始め、無医村だった村に診療所を立ち上げるなどの功績が認められたロシナンテス理事長の川原尚行氏が「大山健康財団賞」を受賞したほか、福岡歯科大学機能生物化学講座教授の田中芳彦氏の「歯周病原細菌による口腔感染症の病態の解明と治療法の開発」など7人の研究者の研究に対し、「学術研究助成金」が贈られた。

人の支えや温もり学ぶ

015年の活動報告会が3月28日に長野県御代田町の「エコールみよた」で開催され、約300人が来場した。また29日にも坂崎町の「さかきテクノセンター」で開かれ、200人が来場した。

同活動は御代田で開業する歯科医師の林春二氏が中心となって14年前から実施しているもので、フィリピンのスラムで生きている子供達のために無償の歯科治療や歯ブラシ、タオル、固形石けんなどの生活物資の支援などを行っている。

「ハローアルソン・フィリピンアクティビティー　発表の夕の活動の様子についてスライドを交えて報告した。さらに、認知症の両親の看病を続ける中で、今年初めて活動に参加した同医院勤務の歯科助手の平山容子さんは、「改めて人の支えや温かさを学んだ」と発表した。

また、この活動には10年前から地元を中心に全国の高校生が参加している。今年も41人が参加し、その数はこれまでに200人を超えている。

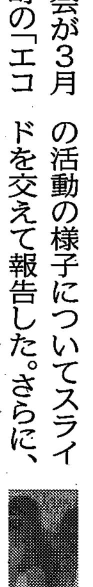
報告会では、参加した高校生一人一人による自らの体験や感想の発表が行われた。

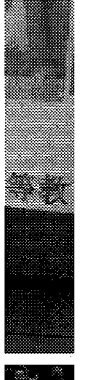
ボランティアを通じ世界の貧困の現実や医療の素晴らしさを目の当たりにし、今まで「当たり前」と思っていた生活がどれほど恵まれていたかを学び、今までただ漠然と送っていた高校生活について、「教育を受けられる素晴らしさを改めて感じた。将来は医学の道に進み、もう一度この活動に戻って来たい」との感想を述べる生徒もいた。

さらに、4日間、初めて親元を離れ、劣悪なスラムの生活を肌で感じた高校生は、「いかに自分が恵まれているか分かった。心から両親に感謝したい」と話した。

林氏はこの活動について「フィリピンの恵まれないスラムの子供達の健康と笑顔のために、これからの時代を担う高校生と共に、本当の豊かな社会づくりを目指してがんばっていきたい」とコメントした。

なお、今回の高校生以外の歯科医師やデンタルスタッフ等の参加者は52人。約1600人を治療した。





㊤
さ
多
が

リハビリ専門職のセミナー開催
4月から全6回

「口腔×リハビリ」をコンセプトにリハビリ特化型デイサービスを実施するデンタルサポート（本社・千葉市、内田武社長）は、「マルチキャリアのセラピストセミナー」の全6回シリーズを開く。

同セミナーは、高齢社会を迎え入院期間の短縮化が進む中で、セラピスト（リハビリテーション専門職）の職場環境や職域が多様化しているのを受け、今後のセラピストの可能性を引き出す目的。講師にはさまざまな業界で活躍するセラピスト。

第1回は4月25日、東京・八重洲の八重洲ファーストビル「ハロー貸会議室」。2回目以降は5月に2回、6月に3回開く。

問い合わせは、TEL043（213）6160（同広報室・中山）まで。

寒天印象材はオムニコ
omnico　株式会社 オムニコ
〒104-0031 東京都中央区京橋1-6-12
☎03-3564-0942